

奄美大島宇検村民の移住

田島 康 弘

(1992年10月15日 受理)

Emmigration of people in Uken Village, Amami Islands

Yasuhiro TAJIMA

第1章 研究目的と方法

歴史的に奄美は他地域に人口を排出してきた地域である。戦前の1920年代がその1つのピーク時であり、戦後の1955～70年のいわゆる日本経済の高度成長期が戦後のピーク時であった。こうした時期に郷里奄美を離れて大阪・東京などの大都市部に移住した人々は、その居住する都市部において互いに連絡をとりあい、更には会をつくって様々な活動を展開してきた。¹⁾

筆者はこれまでこうした現象に興味をもち、社会地理学の立場からいくつかの報告を行ってきた²⁾が、今回は今までとりあげて来なかった大島本島西部に位置する宇検村に注目し、人々の移住状況について検討しようとするものである。とくに、具体的な移住状況については、従来その考察が不十分であったので、今回はこうした点を中心に移住の実態を把握することに努め、調査票に基づくききとり調査を行なって、移住をめぐる諸傾向を整理し、考察を加えた。

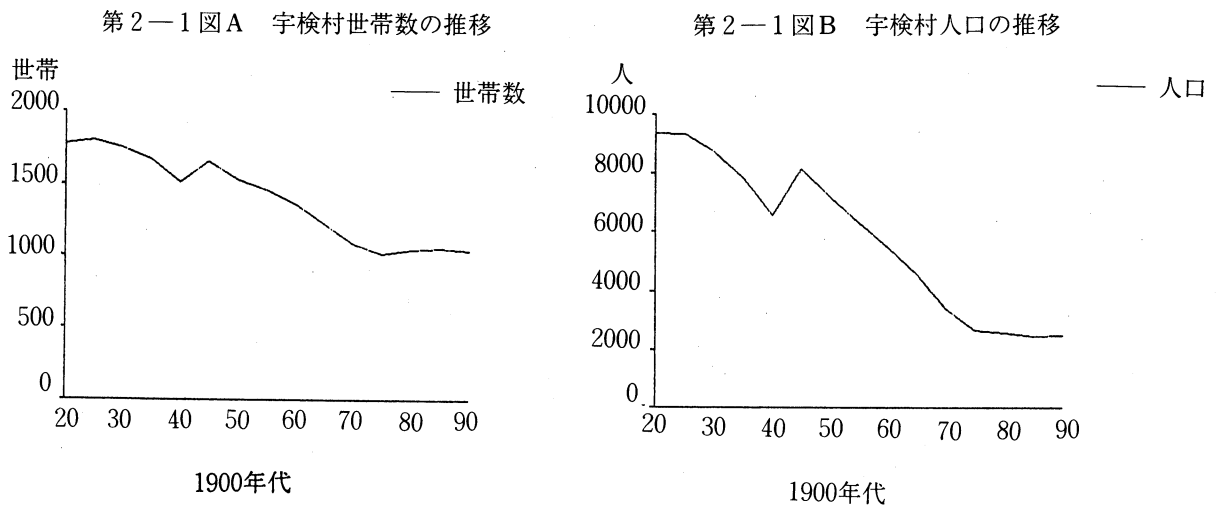
調査は1992年7月12日から17日まで、宇検村において学生11名³⁾の協力の下に行なわれ、所期の目的をほぼ達成することができた。

以下第2章では、宇検村における移住状況の全体像を諸統計、諸文献類などにより把握することに努め、第3章では、我々の行なった実態調査の結果と移住の諸傾向を整理し、第4章で、全体のまとめと若干の考察を行なうことにしたい。

第2章 宇検村の人口減少と転出者の居住状況

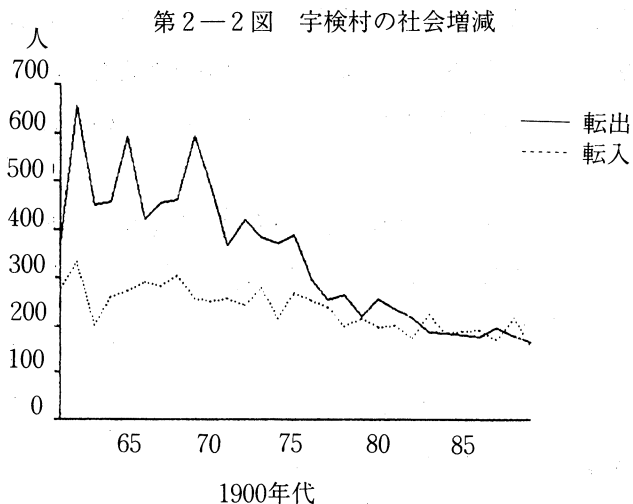
1. 村の人口の推移

まず、1920年から1990年までの70年間における宇検村全体の世帯数および人口の変化を見よう(第2-1図)。世帯数、人口ともに全体的に大きく減少しており、この減少には2つの時期が認められる。第1期は1925年から40年までの戦前の時期であり、第2期は1945年から75年までの戦後の時期である。第1期は世帯数では1,801世帯から1,502世帯へ(84.0%)、人口では9,315人から6,554人へ



(70.4%) 減少した程度であったが、第2期は世帯数では1,655世帯から1,012世帯へ (61.1%), 人口では8,118人から2,671人へ (32.9%) と大きく減少し、戦後の米軍政統治期および1955年以降の高度成長期における人口減少、流出がいに激しいものであったかが示されている。

ここで、この間の宇検村における社会増減について、統計の許す範囲でみておこう。転入、転出統計は宇検村では1962年以降に限られているので、それ以前については不明である。1962年以降をみると1970年位までは転出が約500人台と多く、1971~75年まではほぼ400人台が続くが、1976年以降は200人台となり、やがて転入との差がほとんどなくなってきている (第2-2図)。以上のことは人口減少のカーブが1975年を境にゆるくなっていることと対応していると言え、この間の人口減少が転出によるものであることを示している。



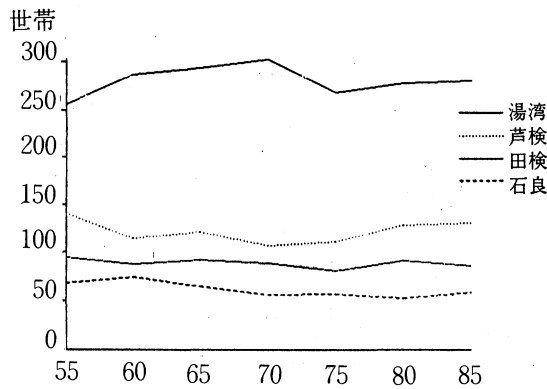
次に、以上の変化を集落別にみよう。1955年から1985年までの30年間における世帯数と人口の変化を集落別にみると、次の3つの類型に整理できるように思う (第2-1表, 第2-3図, 第2-4図)。

Aグループは減少率が最も小さいグループであり、言い変えるとこの間の変化が相対的には最も少ない集落群である。BグループはAとCの間であり、Cグループがこの間の変化が最も大きかった集落群ということになる。

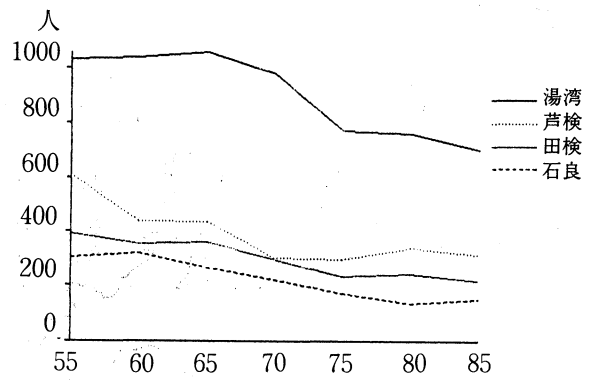
第2-1表 3類型の指標

類型	30年間の減少率		該当集落
	世帯数	人口	
A	80%以上	45%以上	湯湾, 芦検, 田検, 石良
B	50~80%	30~45%	宇検, 生勝, 須古, 名柄, 平田
C	50%未満	30%未満	久志, 部連, 佐念, 阿室, 屋鈍

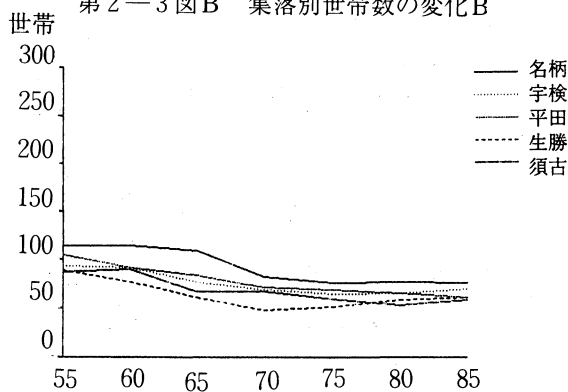
第2-3図A 集落別世帯数の変化A



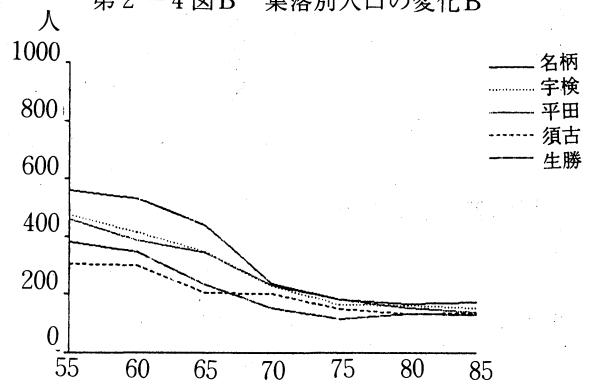
第2-4図A 集落別人口の変化A



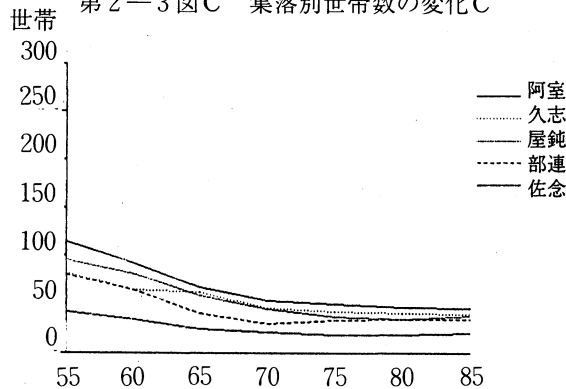
第2-3図B 集落別世帯数の変化B



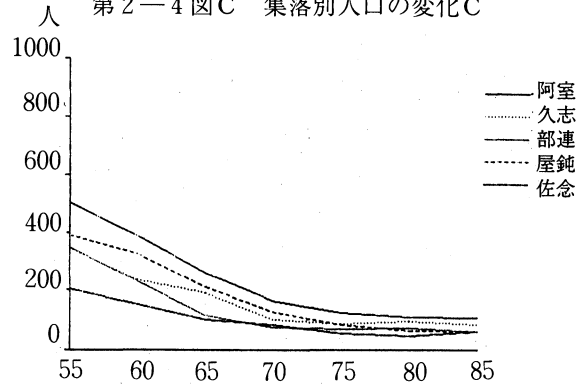
第2-4図B 集落別人口の変化B



第2-3図C 集落別世帯数の変化C

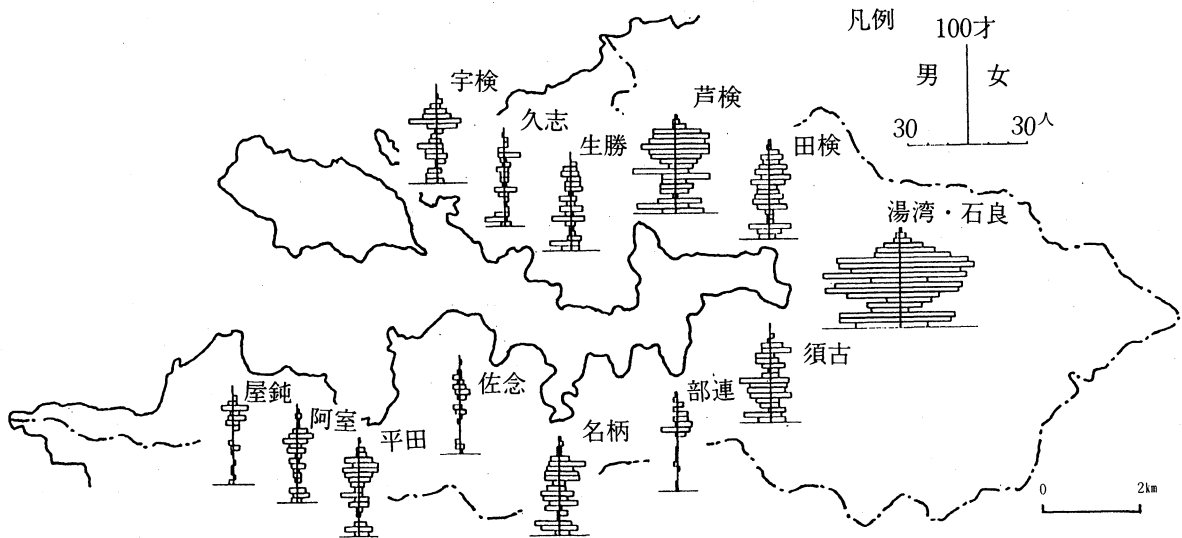


第2-4図C 集落別人口の変化C



これらの集落群の地域的分布状況をみると、Aグループは役場のある湯湾とその周辺の集落であり、Bグループは焼内湾内に分散する集落の中の拠点集落と見ることができるのに対し、CグループはBグループに付随する側面をも持ちつつ基本的には孤立している小集落群であると言えよう。

そこで、各集落の特色をさらに明確にするために、集落毎の1990年センサスの資料による人口ピラミッドを作成した(第2—5図)。これをみると、部連、佐念、屋鈍の3集落が、子供が少なく高齢者の比重が高い集落としてきわ立っているように思われる。これに対し、役場のある湯湾(石良を含む)や、この近くに位置する芦検、田検それに須古などでは、15才以下層の子供も比較的多く、また、人口全体としても多くなっている。



第2—5図 宇検村における集落別人口ピラミッド(1990年)

2. 転出者の居住状況

それでは、これらの宇検村を離れた人々はどこへ行ったのであろうか。今、この全体像を正確に把握することは、こうした資料が少ないので出来ないが、筆者のききとりや部分的な文献等から、大部分が大阪を中心とする関西と東京を中心とする関東の2地域へ移っていることがほぼ明らかである。そこで、関西および関東の2地域への移住者の居住状況についてここでは捉えてみたい。

実態調査を行う過程で、筆者は幸いにも「関西宇検村会名簿」⁴⁾および「関東宇検村会名簿」⁵⁾を、佐念の区長、盛国彦氏から借用することができた。これらは宇検村からの出身者で関西や関東に居住する人々の大部分を把握し載せていると考えられるので、これらの会員数をもって両地域における宇検村からの出身者数とみなすことができよう。

両地区における各集落郷友会(宇郷友会)毎の世帯数および会員数を第2—2表に示した。ここで「会員」について若干説明しておきたい。両宇検村会名簿は宇検村会レベルでまとめられたものではあるがその母体はあくまで各集落(字)郷友会にあり、従って、この名簿の中味も各集落郷友会毎に基準がまちまちであって、世帯主名のみのものであれば夫婦名を載せている会、さらには家族全員の名を載せているものさえある。ここでは、名簿に記入されている限り夫婦までを「会員」として

第2—2表 関西および関東における宇検村各郷友会の世帯数（会員数）

	世帯数	(会員数)		世帯数	(会員数)	世帯数計
関西屋鈍会	148	245	関東屋鈍会	107	152	255
阪神阿室郷和会	101	176	〃 阿室会	82	82	183
関西平田会	111	191	〃 平田会 ¹⁾	96	107	207
〃 佐念会	73	73	〃 佐念郷友会	46	46	119
〃 名柄会	104	194	〃 名柄会	65	65	169
〃 部連会	114	114	〃 部連会	168	195	282
〃 愛須会	141	141	〃 愛須会	81	83	222
阪神湯湾石良会	160	160	〃 湯湾会	235	246	395
			〃 田検会	61	68	61 + α
関西芦検会	129	223	東京芦検会	387	387	516
			関東生勝会	42	42	42 + α
関西久志会	151	172	〃 久志会	27	27	178
〃 宇検会	54	65	〃 宇検会	96	107	152
計	1286	1754	計	1493	1607	2779

注1) 関東太平会とも言われる

数えた。というのは、規約には「関西在住の鹿児島県大島郡宇検村出身者とその縁故者により組織」（関西宇検村会）するとか、「宇検村出身者で、関東地区に居住する者並びにその縁故者で組織する」（関東宇検村会）などとあることから、会の構成員に縁故者を含めていることが明らかだからである。ただ、全体として会ごとの比較を行うためにも、世帯数の方をより基本的なものとして考えておきたい。

この表から、関西および関東の合計では芦検と湯湾（石良を含む）の出身者が多いこと、また、現在の集落規模からみると、部連や屋鈍の出身者も多いことなどが注目に値しよう。また、関西と関東とを比べると、関西の方が多い会が7つ、関東の方が多い会が4つとそれぞれの特色をもつことが示されている。なお、関西の名簿には田検および生勝の会が存在しない。これはこの2集落の出身者の組織化が十分になされていないためではないかと思われ、従って、関西におけるこの2集落の出身者については、かなりの欠落があると考えなければならないだろう。

次に、もう少し詳細にこれらの人々の居住傾向を把握してみよう。関西における府県別居住傾向を示した第2—3表によると、全体としては、1) 関西居住者の9割が大阪府と兵庫県の2府県に集中しており、京都府や奈良県などは少ないこと。2) 大阪府の中では区部に30.7%が集中し、その他は北部、東部、南部の諸都市に分散していること。3) 兵庫県では尼崎に43.8%、神戸市に23.8%とこの両市で3分の2近くを占め、とくに尼崎への集中度が高いことがわかる。

また、これを集落郷友会別にみると、1) 全体的には大阪府下の比重が高い中で、部連や久志では尼崎市に、須古（愛須会）は神戸市に集中するなど集落毎の特色もみられること。2) また、屋鈍や名柄も尼崎がやや高く、平田や湯湾・石良は大阪区部が比較的高いこと、などが注目される。これら集落毎の特色の解明については今後の課題とし、先に進みたい。

第2—3表 関西における宇検村出身の居住分布

府県名	屋鈍	阿室	平田	佐念	名柄	部連	愛須	湯湾石良	田検	芦検	生勝	久志	宇検	計	割合
大阪	66	47	67	43	59	24	43	102		58		61	26	596	46.3%
区部	20	9	23	15	10	5	13	41		12		24	11	183	
	府下	46	38	44	28	49	19	30	61	46		37	15	413	
兵庫	64	50	27	23	44	70	88	52		36		84	24	562	43.7
尼崎	39	22	9	12	28	31	18	11		8		62	6	246	
	神戸	4	6		5		22	52	20	12		3	10	134	
	その他	21	22	18	6	16	17	18	21	16		19	8	182	
京都	5		3			1		1		13		1		24	1.9
奈良	4	1	2	1	1			3		1		2	3	18	1.4
滋賀	2		1	1						2				6	0.5
その他	2	3		3		9	10	1		13		3	1	45	3.5
不明	5		11	2		10		1		6				35	2.7
計	148	101	111	73	104	114	141	160		129		151	54	1286	100.0

関東における宇検村出身者の居住傾向を第2—4表に示した。まず、全体としては、1)東京都に關東居住者の3分の1、神奈川県に3分の1とこの2都県で全体の3分の2を占め、とくに人口比からみて神奈川県の比重が高いことが特色と言えること、2)また、千葉県(13.2%)や埼玉県(12.9%)の居住者もかなり多いこと、3)さらに、神奈川県内では横浜市に4割弱(38.4%)、川崎市に2割程度(20.1%)とこの両市の占める比重が高いことなどがわかる。

第2—4表 関東における宇検村出身の居住分布

府県名	屋鈍	阿室	平田	佐念	名柄	部連	須古	湯湾	田検	芦検	生勝	久志	宇検	計	割合	
東京	48	33	31	14	25	38	29	68	27	118	19	12	34	496	33.2%	
23区	42	28	28	11	23	25	19	52	15	72	10	9	26	360		
	都下	6	5	3	3	2	13	10	16	12	46	9	3	8	136	
神奈川	20	23	39	21	17	51	21	69	24	165	9	5	34	498	33.4	
横浜	6	8	14	7	4	25	5	25	9	64	2	2	20	191		
	川崎	10	7	9	3	2	4	3	10	7	34	1	1	8	100	
	その他	4	16	16	11	11	22	13	34	8	67	6	2	6	207	
埼玉	19	8	12	6	6	12	9	30	4	40	12	9	17	192	12.9	
千葉	14	2	9	3	11	60	9	33	5	36	1	1	6	196	13.1	
北関東 ¹⁾	2		2	1	1		2	2	1	10			1	24	1.6	
その他 ²⁾			2		2	2	5	4		15	1		1	32	2.1	
不明	4		1	1	3	5	6	29		3			3	55	3.7	
計	107	82	96	46	65	168	81	235	61	387	42	27	96	1493	100.0	

1) 栃木、茨城、群馬の3県

2) 静岡、山梨、長野などが多い。

次に、これを集落郷友会別にみると、1)東京都居住者の比率が高い(4割以上)会が多いこと(屋鈍、阿室、田検、生勝、久志)。2)他方、神奈川県居住者が多い(4割以上)会も存在すること(平田、佐念、芦検)。3)この他では、東京が多い(名柄、須古)か、東京と神奈川とが同程度(湯湾、

宇検)かであるが、部連のみは千葉県居住者が最も多いこと、などがわかる。

以上、関西および関東の居住傾向を簡単にまとめると、宇検村出身者は各郷友会毎に一定の特色を持ちつつも、全体としては「阪神」および「京浜」の両地方に集中して居住しているということになるだろう。

第3章 宇検村居住者からみた移動の実態

本章では、1992年7月現在の宇検村居住者を対象として、その世帯関係者の移動実態を把握し、これを通じて、人口移動の諸傾向やこれに伴って生ずる諸問題について論ずることにしたい。

1. 調査の概況

1992年7月、我々は宇検村の2集落の全戸を対象として、住民の移動に関する実態調査を行なった。選択した集落は、先に示した世帯数および人口減少率の最も高いCグループの中から部連と佐念の2集落を選択した。⁶⁾ 調査時点における両集落の世帯数は部連が29、佐念が18であった。我々は2名ずつ6グループをつくり、事前に作成した調査票をもって各家を訪問し、面接してききとりを行うという方法で調査した。その結果、部連では22戸(75.9%)、佐念では14戸(77.8%)の回答を得ることができた。全体としての調査票の回収率は76.6%である。なお、回答の得られなかった世帯のほとんどは留守世帯であった。以下の調査の結果について述べよう。

第3-1表 調査集落の世帯員数

世帯員数	部連	佐念	計	割合
1人	8	3	11	30.6%
2	9	8	17	47.2
3	4	1	5	13.9
4	1	1	2	5.6
5				2.8
6		1	1	
計	22	14	36	100.0

2. 世帯員数と年齢

はじめに、調査世帯の世帯員数と年齢構成について簡単にみておこう。各世帯の世帯員数をみると、2人世帯が半数近くあり、

第3-2表 調査集落の年齢構成

年齢	部連(男, 女)	佐念(男, 女)	計(男, 女)	割合
90~	3(2, 1)	1(0, 1)	4(2, 2)	5.4%
80~89	2(0, 2)	3(1, 2)	5(1, 4)	6.8
70~79	12(3, 9)	6(4, 2)	18(7, 11)	24.3
60~69	17(8, 9)	11(5, 6)	28(13, 15)	37.8
50~59	4(0, 4)		4(0, 4)	5.4
40~49	1(1, 0)	8(3, 5)	9(4, 5)	12.2
30~39	2(2, 0)		2(2, 0)	2.7
20~29	1(1, 0)		1(1, 0)	1.4
10~19		2(1, 1)	2(1, 1)	2.7
0~9		1(0, 1)	1(0, 1)	1.4
計	42(17, 25)	32(14, 18)	74(31, 43)	100.0

(第3-2表)。以上のことから、調

査集落の世帯の特色は高齢者夫婦または高齢者の1人住いが一般的であることが明らかである。

3. 村内居住者の移動状況

移動状況を把握するために、まず、現在村内に居住している者の移動経験の把握を試みた。実際の調査では「直接の応答者」と「その他の世帯員」とを分けて、それぞれの移動状況についてききとりを行なったが、ここでは両者をつつにまとめて整理した。⁷⁾

1) 転出経験のある者の比率をみると、全体では64.9%とかなり高いとすることができよう。これを男女別にみると男性が77.4%、女性は55.8%で男性の方がより高くなっている(第3—3表)。

2) 1人の者が複数回、転出することが考えられたため、1人につき3回までその転出経験を尋ねたが、転出回数の結果は1回のみが80%近くを占めることとなった(第3—4表)。すなわち、特定の人間の長期の居住経験の回数は、それ程多くないということになる。

3) 転出の時期についてみると、1930年代を中心とする戦前の時期と1960年代を中心とするいわゆる高度成長期との2つの時期に分けられるように思われる(第3—5表)。

4) この転出の時期を転出者の転出時における年齢で整理してみると、10代と20代で6割強を占めていることから、彼らの若い時期に転出した者が多いことがわかるが、他方、30代と40代の転出も25%程あって必ずしも少なくないと言えるよう(第3—6表)。

第3—3表 転出経験者の割合

		調査者総数	転出経験者数	割合
部連	男	17	15	88.2%
	女	25	15	60.0
	計	42	30	71.1
佐念	男	14	9	64.3
	女	18	9	50.0
	計	32	18	56.3
計	男	31	24	77.4
	女	43	24	55.8
	計	74	48	64.9

第3—4表 転出回数

回数	部連	佐念	計	割合
1	26	12	39	79.2%
2	4	5	9	18.8
3		1	1	2.1
計	30	18	48	100.0

第3—5表 転出の時期

年代	部連	佐念	計	割合
1910	1		1	1.7%
20		1	1	1.7
30	6	9	15	25.4
40	7	7	14	23.7
50	7	1	8	13.6
60	5	4	9	15.3
70	4	1	5	8.5
80	4		4	6.8
不明		2	2	3.4
計	34	25	59	100.0

第3—6表 転出時の年齢

年齢	部連	佐念	計	割合
0~9才		4	4	6.8%
10~19	12	10	22	37.3
20~29	7	7	14	23.7
30~39	5	2	7	11.9
40~49	7	1	8	13.6
50~59	3		3	5.1
60~69		1	1	1.7
計	34	25	59	100.0

